

ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO.16

8月31日

勝ち切れない大坂なおみ

全米オープンテニスで、大坂は2回戦で姿を消した。全仏オープン2回戦の対シオンテック戦で見せた強さは、どこへ消えたのだろうか。大坂の敗因は何だろうか。

サーブ力が向上している女子選手

1回戦の対オスタペンコ戦は完べきだった。世界ランク10位を相手にほぼ完勝だった。大坂が勝つパターンは第一サーブが入り、サーブポイントを稼ぐことができる場合だ。この試合で、ファーストサーブの確率は60%で、ファーストサーブが入った時のポイント確率は80%だった。この確率で勝負できれば、優位に試合を進め

2024年8月31日

ることができる。セカンドサーブによるポイント取得も75%だから、サーブ力で相手を圧倒する勝ちパターンである。

ストローク戦でも簡単なミスが少なく、アンフォーストエラーはオスタペンコの21本にたいし、わずか5本だった。オスタペンコにはパワフルなストロークがあり、ストローク戦になるとポイントを取るのが難しいが、大坂のパワーが上回り、オスタペンコのミスを誘った。

やや意外だったのは、オスタペンコのサーブ力である。彼女は体力がありパワフルなストロークが武器だが、ストロークに比べてサーブ力が弱く、長い間、ダブルフォルトを重ねるイップスにかかっていた。ところが、ハードな練習を重ねた結果なのだろうか、サーブのパワーが増し、ダブルフォルトが少なくなった。あれほどサーブに苦しんでいたオスタペンコが、180km/h近いファーストサーブを打ってくるのに驚いた。この試合でサーブミスエースを5本も取った（大阪は9本）。

しかし、確かにサーブの威力は増し、簡単にダブルフォルトを重ねることはなくなったが、この試合で6本のダブルフォルト（大阪はゼロ）を記録している。それでも、ちょっと前までの自信のないサーブは克服された。もともと太りやすい体質で、今年の初めまでは体重が80kgを超えているのではないかと思えるほど、ずんぐり体型だった。ところが、現在はかなり体を絞っている感じを受けた（一時期から、選手の体重は公表されないことになった）。かなりハードなトレーニングをこなしていることが感じられたが、それでもこの日の大坂の出来には敵わなかった。

久しぶりにトップテンの選手を下した大坂は、ベンチに下がると涙を流し、自信を持てたことに喜びを感じているようだった。

IQ 対本能

2回戦の相手はチェコのムホバである。昨年の全米オー分のベスト4である。手首の手術でランキングを落としているが、なかなかの試合巧者でテニスIQが高い選手である。手首の状態が悪ければ勝負にならないが、手首に問題がなければかなりの難敵である。

ムホバのテニスは、ランキング1位で引退したバーティとよく似ている。オールラウンドプレーヤーで、ストロークに強く、両手バックハンドだが、片手でスライスを打てることもバーティと同じである。ネットプレーにも強く、俊敏な動きでネットに詰める。サーブは弱いと思っていたが、180km/h 台のスピードがあり、この試合で7本のサーブミスエース（大阪は6本）を記録した。ファーストサーブの確率も80%で、大坂の57%を上回っていた。こうなると、多彩なストロークを繰り出せるムホバを相手にするのは難しい。身長は大阪を同じ180cmだが、ムホバの方がはるかに俊敏である。

大坂も左右の動きは悪くはないが、前後の動きに難がある。ムホバは前後に動く俊敏さに優れているからネットプレーもうまい。大阪はムホバのネットプレーと、バックハンドのスライスに苦しんだ。ネットプレーとバックハンドスライスは大阪にない技術である。これに加え、大坂を上回るサーブ力を発揮しては、大坂に勝ち目はなかった。

それでも、第二セットで大坂はセットポイントを握るまで互角に戦った。大坂の本能テニスとムホバのIQテニスが競り合った。セットポイントを迎えたところで、大坂はポイントを取り損ない、タイブレークでも押し切れる所を押し切れなかった。試合を重ねていないので、勝負勘が鈍っている。大坂にとって、無念の敗退となった。得意の全米コートで、もう少し試合を重ねたかったに違いない。

女子テニスのサーブ力は格段に向上しており、もう大坂の独壇場ではない。大坂のサーブの調子が悪ければ、並みの選手になってしまう。サーブ力を付けた選手が、俊敏な動きでネットプレーを展開し、ドライブとスライスを打ち分けるストロークを展開すると、大坂もそう簡単に勝てなくなる。本能的なパワーテニスから、俊敏性を高め、ストロークの技術力を向上させない限り、ランキング上位の選手との戦いは厳しい。